

[2023年度 問題]

史的唯物論に基づく社会変動について、提唱された社会全体の変動が生じていない理由にも言及し、説明せよ。

[解答のポイント]

(1) 史的唯物論の説明

①提唱者（少なくともマルクス）の名前、②物質的条件を基礎とする理論であること、③「生産関係」「生産力」「土台（下部構造）」「上部構造」というキーワードは挙げておきたい。

(2) 史的唯物論に基づく社会変動

「生産力の上昇により矛盾が生じ、それを解決するために革命が起こる」という論理は入れておきたい。

(3) 提唱された社会全体の変動が生じていない理由

ここでは、資本主義から社会主義への移行が全面的には生じなかったことについて説明しよう。

解答例では、社会学のテキストに従って、①ロストウやペルの収斂理論の説明、②ダーレンドルフ等の階級対立の制度化の説明を挙げておいたが、他にも③新中間層の増加によって中流化が進んだという説明、④「福祉国家化」のうち所得再分配に注目した説明など、様々な議論がありうる。

さらにいえば、「マルクスのような一元論的な説明は単純すぎる。社会変動の要因はもっと多様だ」という反論もありうるだろう。

[解答例]

史的唯物論とは、ドイツの社会学者K.マルクスとF.エンゲルスが提唱した社会変動の理論であり、人間生活の物質的条件を基礎として社会構造とその歴史的発展を把握しようとするものである。

まず、ものの生産に必要となる材料や道具が「生産手段」である。また、生産過程で生産手段・生産活動をめぐって人間同士で結ばれる「生産関係」と物質的財貨の生産で人間が自然を支配する力である「生産力」の総体が「土台」（下部構造）であり、その上に法律的・政治的制度や社会的意識形態である「上部構造」が載って形成される全体が「社会構成体」である。

だが、技術革新により生産力が上昇すると生産関係と矛盾が生じ、この矛盾を解決するために階級間の闘争が激化して革命が起こり生産関係が変革され、旧来の上部構造も変革される。マルクスは、資本制社会が高度化すると生産手段の所有者である資本家階級は強大化する一方で生産手段の非所有者である労働者階級は搾取され貧困化するため階級の対立は激化し、その対立・矛盾が最大限に達した時、世界の労働者が団結して資本家支配を打倒して資本主義から社会主義へと移行する革命が起こると予言した。

しかしマルクスの予言に反して、社会主義革命が成功したのは産業が未発達な地域だけであり、産業化が進んだ地域では階級対立は激化せず革命に至らなかった。マルクスが提唱した社会全体の変動が生じていない理由として、第一に資本主義の変貌が挙げられる。マルクスの時代の資本主義は自由放任主義を徹底するものだったが、20世紀半ばからは社会主義の計画の要素を取り入れ、市場経済を前提としつつある程度は計画的に市場介入する福祉国家体制が主流となった。第二に、階級対立の制度化が挙げられる。資本主義の成熟に伴って資本家と労働者はそれぞれ組織化されてお互いの関係にも一定のルールが形成され、労働者の生活水準向上により対立関係が沈静化し、革命に至らなかった。

以上

[2022年度 問題]

ウォーラステインの世界システム論について説明せよ。

[解答のポイント]

公務員試験の社会学でウォーラステインの世界システム論が出題されることはあまりないため、十全な答案を書くことは非常に難しかっただろう。したがって解答例は「絵に描いた餅」になるが、世界システム論の特徴として以下の点には触れておきたい。

- 1) 社会の構造変動について、国民国家単位ではなく、国家を超えた国際的な関係性の視点から捉える理論であること。
- 2) 従属理論の発展型ではあるが、中心／周辺の二層ではなく、中核／半周辺／周辺の三層で概念化したこと。
- 3) 中核／半周辺／周辺に位置づけられる国は固定されておらず、流動的であること。
- 4) ヘゲモニーを獲得した国家として17世紀のオランダ、19世紀の英国、20世紀の米国を挙げていること。

[解答例]

世界システム論とは、社会の構造変動について、国民国家単位の発展段階論を超えて、国際的な分業体制全体を包摂する関係性の視点から動態的に分析する理論である。

W.ロストウに代表される近代化論では、いずれすべての国は経済成長をとげるとしていたが、停滞から抜け出せない発展途上国もあり、その理論的有効性が問われていた。それに対してA.フランクやS.アミンに代表される従属理論は、先進国（中心）の繁栄は発展途上国（周辺）の低賃金・不払い労働に依存しており、この関係性を維持する強固な仕組みがあると指摘した。

米国の歴史社会学者I.ウォーラステインは、アフリカ地域の近代化を研究する中で、発展途上国地域の社会変動は、その外部の地域との関係性ととも理解する必要があるとして、従属理論やアナル学派の歴史理論の影響を受けつつ、世界システム論を提唱した。

ここで「世界システム」とは、経済的分業関係で結ばれた相対的に完結する領域のことである。ウォーラステインは『近代世界システム』において、16世紀から形成された資本主義世界経済を「近代世界システム」と捉え、当初は西ヨーロッパを「中核」、東ヨーロッパとラテンアメリカ等を「周辺」として成立した近代世界システムが、その拡大過程で他の世界システムをも包摂し、ついには世界全体を網羅する単一のシステムとなる過程を描いた。

世界システムに包摂される国家や地域は、中核／半周辺／周辺の三層に位置づけられて物質的不平等と不均等発展がもたらされるが、その位置づけは流動的であり、周辺から中核への上昇や、中核から周辺への下降も含めた動態的な過程として捉えられる。また、中核に位置する国家同士でも熾烈な競争が生じ、産業・金融・軍事等の点で極めて優位となりヘゲモニーを獲得する国家が出現することもあるとして、その事例として17世紀のオランダ、19世紀の英国、20世紀の米国を挙げている。

以上

[2021年度 問題]

ブルデューの文化的再生産論について述べよ。

[解答のポイント]

(1) 「文化的再生産」の定義

「再生産」の内容（親世代の社会階層的地位・職業的地位が子世代に引き継がれること）は必須。また、家族等の社会的環境で伝達される文化の影響で「再生産」されることも必須である。

(2) 「文化資本」と「ハビトゥス」への言及

「文化資本」については「家族等の社会的環境で伝達される文化的な財・知識・言語能力、その他のハビトゥス等」、「ハビトゥス」については「行為の傾向・趣味判断・ものの考え方」という内容を示しておく必要がある。少なくとも、文中でこの2つのキーワードを用いることは必須である。

(3) 文化的再生産論の説明

「文化資本」や「ハビトゥス」と関連づけて説明することが必要となるだろう。いずれにせよ、それぞれの定義を示すだけでは短い文章で終わってしまうため、中身のある説明にするためにも、様々な具体例を示した方がよい。

[解答例]

「文化的再生産」とは、家族等の社会的環境で伝達される文化的な財・知識・言語能力、その他のハビトゥス等の「文化資本」の影響を通じて、親世代の社会階層的地位・職業的地位が子世代に引き継がれることをいう。

次に「ハビトゥス」とは、経験に基づき個人に内面化された行為の傾向・趣味判断・ものの考え方のことである。フランスの社会学者P.ブルデューは、フランスの旧植民地アルジェリアを調査・研究する中で、通常は「個人的なもの」とされている性向・くせ・態度でさえ社会的影響を受けており、民族・階級・地域・性別等によって特徴が異なることに注目した。

学校の試験をはじめとして、高い社会的地位を得るための選抜基準を作成しているのは、すべて高学歴・高地位の人々である。選抜試験は、いくら客観的に見えても、特定の階層の人たちの知識と考え方を身につけているかどうかを審査している。ここで、高学歴・高地位の家庭に育ち、家庭環境を通じてごく自然に身につけ慣れ親しんだハビトゥスは、選抜試験の場面で有利に働く。たとえば、小さい頃から読書の習慣がついていれば学校の授業で様々な文章を読まされても苦にならないかもしれないが、そうでなければ苦痛に満ちた時間で終わるかもしれない。小さい頃から家庭内で英語が飛び交っていたり親の海外赴任等で英語圏で暮らした経験があったりすれば学校の英語の時間は苦にならないかもしれないが、そうでなければ苦痛に満ちた時間で終わるかもしれない。

このように、趣味判断や学習への興味もまた出身階層の影響を強く受けているとブルデューは考える。そして、入試をはじめとする各種選抜試験は、現実には上流階層のハビトゥスを身につけているかどうかを判定する役割を果たしており、文化資本を相続した上流階層の子弟に大きく有利に働くことが多いがゆえに、一見客観的な能力判定の制度が社会階層の固定化に寄与していると指摘した。

以上

[2020年度 問題]

ジンメルの形式社会学について説明せよ。

[解答のポイント]

東京都I類Bや、かつての特別区I類のみならず、地方上級・国家一般職レベルの公務員試験の専門記述試験で、ジンメル forms 社会学が出题されたことはほとんどない。さらに、ジンメルの議論は抽象的であるため、十全な答案を書くことは困難だっただろう。以下は「解答例」であるために細かい内容まで書いてあるが、現実的には①②の論点を適切に説明していれば、文章が短かったとしても要件は満たしているだろうと思われる。

① 総合社会学への批判という側面

コントやスペンサー等の総合社会学を乗り越えるという問題意識から出てきた議論であること。

② 「内容」と「形式」の区別

「社会化」(相互作用・コミュニケーション)の「内容」と「形式」を区別した上で、「形式」に注目した社会学であること。

③ M.ウェーバーやÉ.デュルケムとの違い

ウェーバーの社会名目論(方法論的個人主義)やデュルケムの社会实在論(方法論的集合主義)と異なる第3の立場であること。

これらのうち、①と②は必ず書いておくべき論点である。できれば、③にも言及することが望ましい。

[解答例]

「形式社会学」とは、個人間の心的相互作用の形式を固有の研究対象とする社会学上の学派であり、ドイツの社会学者G.ジンメルが創始した。

A.コントやH.スペンサー等の第1世代の社会学者は、社会現象全体の総合的・包括的認識を志向したことから、総合社会学・百科全書的 sociology などと呼ばれる。それに対して、M.ウェーバー、É.デュルケム、G.ジンメル等の第2世代の社会学者は、個別科学・専門科学としての sociology を確立すべく、社会を社会たらしめている、 sociology 固有の研究対象を探究した。このうちウェーバーは、実在するのは個人々々だけで社会・集団は名目的にそう呼ばれているだけだと捉える社会名目論(方法論的個人主義)の立場を採り、個人々の行為・信念を研究対象とした。またデュルケムは、社会は個人々々人を超越したものとして存在すると捉える社会实在論(方法論的集合主義)の立場を採り、規範・制度等の「社会的事実」を研究対象とした。それに対してジンメルは、個人現象でも集合現象でもなく、個人間にある心的相互作用に注目する第3の立場を採った。

ジンメルは、個人間の心的相互作用による関係形成を「社会化」と呼び、その「内容」と「形式」を区別した。たとえば、政治・経済・宗教といった相互作用を生み出すのは政治目的・経済的利益・信仰心などの目的・意欲・関心であり、これは各領域によって異なる。それに対して、上位と下位、闘争・競争、模倣、分業、党派形成などの関係性は、どの領域でも共通してみられるものである。こ

のうち、目的・意欲・関心が社会化の「内容」、関係性が社会化の「形式」に該当する。そしてジンメルは、社会化の形式こそが社会学固有の研究対象であると主張し、この立場を「形式社会学」と呼んだ。

さらに、晩年になるとジンメルは、形式社会学を「純粹社会学」と言い換えて、「一般社会学」「哲学的社会学」という部門と並置して体系づけている。

以上

[2019年度 問題]

マーソンのアノミー論について、五つに分類される個人的適応様式に言及して説明せよ。

[解答のポイント]

1 アノミーの定義

「アノミー」の一般的な定義について述べる必要がある。その際には、デュルケムについても触れておくといだろう。ただし論述のテーマはあくまでマーソンだから、デュルケムへの言及は最小限にとどめておくこと。

2 アノミーの発生原因

アノミー状況の発生原因として「文化的目標と制度的手段のずれ」について触れること。

3 5種類の名称

「同調」、「革新」、「儀礼主義」、「逃避主義（戦線離脱）」、「反抗」それぞれの名称と、文化的目標と制度的手段それぞれの承認／拒否の組合せについて正確に書くこと。なお、これは「アノミーの5類型」ではなく「アノミー的状況への個人的適応様式の5類型」であることを注意しておこう。

これらが適切に書けていれば、ひとまずは合格答案といえる。いずれにせよ、お約束のキーワードはできるだけ多く挙げておきたい。

[解答例]

「アノミー」とは、社会的に共有された規範が失われる事態（規範喪失）を意味する言葉である。フランスのデュルケムが「アノミー的分業」や「アノミー的自殺」を定式化したことで社会学の概念として定着し、マーソンもアメリカ社会の分析にこれを用いた。

マーソンは、社会や文化が人々に課す文化的目標と、それを達成するために個人に与えられた制度的手段とのずれに注目し、アノミー発生の原因として、制度的手段が不均等に配分されている社会状況を挙げた。たとえばアメリカ社会では、誰でも努力すれば社会的・経済的に上昇できるとする「アメリカン・ドリーム」という文化的目標を「機会平等」の名の下にすべての人々に強制する半面、それを達成するための制度的手段（たとえば、名門大学への入学や一流企業への就職）は階級的・人種的に不平等にしか配分されていない。このようなアメリカ社会への個人的適応の様式を、マーソンは同調・革新・儀礼主義・逃避主義・反抗の5つに類型化した。このうち、「同調」は文化的目標と制度的手段の両方を承認する類型、「革新」は文化的目標は承認するが既存の制度的手段は拒否する類型、「儀礼主義」は文化的目標を断念・拒否しつつも制度的手段は承認しつつける類型、「逃避主義」は文化的目標と制度的手段の両方を拒否する類型、「反抗」は既存の文化的目標や制度的手段を拒否し、新たな目標や価値を提示する類型である。このうち、「同調」のみが合法性の範囲に収まった適応様式であるのに対し、それ以外の類型は逸脱となり、実際に非合法的な犯罪・非行・薬物中毒として現れたり、その予備軍となったりする。

マーソンは、逸脱の要因を個人の生物学的・心理学的特性に還元することなく社会構造の問題としており、文化的目標と制度的手段の乖離による緊張という観点から論じることから、この立場は「緊張理論」と呼ばれる。これは彼のいう「中範囲の理論」の一つである。

以上

[2018年度 問題]

マッキンヴァーによる社会集団の類型を二つ挙げ、それぞれ説明せよ。なお、両者の関係についても言及すること。

[解答のポイント]

マッキンヴァーの社会集団類型自体は基本的な論点であり、近年の東京都Ⅰ類Bでは出題されていないものの、1994年に特別区Ⅰ類で「テンニースとマッキンヴァーの社会集団の類型について説明せよ。」が出題されていることから、十分に出題が予想しうる論点だった。とはいえ、マッキンヴァー単独での出題となると十分な分量を書くのは難しいことから、他の社会集団類型と比較しながら説明していくことが現実的だろう。

(1) 「コミュニティ」と「アソシエーション」の対比

① 関心に基づく分類であること、②包括的/部分的、または共同関心/分有関心という対比、は挙げておくべきだろう。

(2) 「コミュニティ」と「アソシエーション」の実例

① コミュニティでは国民社会、④アソシエーションでは国家（または政府）と家族、は実例として挙げておくべきだろう。

(3) 両者の関係

① コミュニティはアソシエーションの母体であり、アソシエーションはその器官であること、②アソシエーションはコミュニティの中で限定された機能を遂行すること、は挙げておくべきだろう。

(4) 他の社会集団類型との比較

必須論点ではないが、他の社会集団類型との比較はコミュニティ/アソシエーションの特徴を示すことにもなる。そこでは、ゲマインシャフト/ゲゼルシャフト、第一次集団/第二次集団、基礎社会/派生社会、生成社会/組成社会等と比較して、基礎集団/機能集団である点は共通するものの、前近代的集団と近代的集団ではなく、包括的か部分的かという対比である点は挙げておきたい。

(5) 多元的国家論について

必須論点ではないが、多元的国家論はマッキンヴァーのコミュニティ論の軸となるテーマなので、可能であれば挙げておきたい。その場合は、国民社会がコミュニティ、国家がアソシエーションに対応することは示す必要がある。

以上のうち、(1)～(3)が適切に書けていれば、仮に文章が短かったとしても出題者が意図した水準は達成しているだろう。より説得力を増すためには、(4)や(5)についても適宜言及していくとよい。

[解答例]

アメリカの政治社会学者R.マッキンヴァーは、諸個人の関心の種類に注目し、社会集団を、類似・共同関心によって成立する「コミュニティ」と特殊・分有関心によって形成される「アソシエーション」に類型化した。コミュニティは、言語や慣習等を共有する人々の間で、地域性と共同性を基礎として自生的に成立し、その範囲が生活の全領域にわたる包括的な集団である。例としては村落・都市・国民社会が挙げられる。これに対してアソシエーションは、特定の類似した関心・目的を持つ

人々が、それらを達成するために意識的に結合して形成する人為的集団であり、コミュニティの中で限定された機能を遂行することを目的として、コミュニティの器官として派生してくる集団である。例としては家族・教会・政党・国家が挙げられる。

コミュニティ／アソシエーションは、F.テンニースのゲマインシャフト／ゲゼルシャフトと同様に基礎集団と機能集団の対比ではあるものの、前近代的集団と近代的集団ではなく、包括的か部分的かという対比である。家族はテンニースの分類ではゲマインシャフトに該当するが、部分領域であるためマッキーヴァーはアソシエーションに分類している。

マッキーヴァーによれば、コミュニティはアソシエーションの母体であり、アソシエーションはその器官なので時代が変化しても交替しないが、成員の個性と社会性が発達することによりコミュニティも発達・拡大し、それに伴う社会関係の分化と拡大により、アソシエーションも無数に表れるようになり、それを覆う世界大のコミュニティが形成されるという。

さらにマッキーヴァーは、一元的国家論者が古代ギリシャの都市国家を念頭においていたために国家とコミュニティを区別していないことを批判し、国家は他の諸集団を統制する役割を果たしているもののアソシエーションであり、コミュニティである国民社会の中で行政的・政治的機能を果たす一集団に過ぎないとして、多元的国家論を展開した。

以上

[2017年度 問題]

ラザースフェルドによるマス・コミュニケーションの3つの機能について、それぞれ具体例を挙げ
て説明せよ。

[解答のポイント]

社会学の枠では、マス・コミュニケーション論が出題されるのは1994年以来だが、政治学の枠で
2005年に出题された内容と重なっているため、政治学の過去問を参考にして準備していた者は、その
知識で書けたはずである。

1 「マス・コミュニケーション」の定義

専門記述では、冒頭で主題に対する定義を示す必要がある。マス・コミュニケーションについて
は様々な定義がありうるが、①伝達相手（「不特定多数」、「公共」、「大衆」等）と、②「大量」の
2つの言葉は入れておきたい。

2 マートンの名前

問題文にはラザースフェルドだけ挙げられているが、マートンとの共著論文で提示された3機能
なので、マートンの名前も挙げておきたい。

3 ラザースフェルドとマートンの3機能

各機能の名称については様々な訳語があるため、ある程度の幅があってもかまわないが、機能の
説明がずれると減点の対象となる。

4 具体例

3機能の特徴を適切に例示するものであれば何でもよい。解答用紙の大きさを考慮すると、それ
ほど多くの具体例を示すことはできないだろう。

5 まとめ

こちらは重要度は低いので、「それらしく」書かれてあれば問題ない。

なお、正確にいうと、ラザースフェルドがマートンとの共著論文で示したのは「マス・メディア」
の3つの機能である。そのため、解答例の書き出しでは問題文に合わせて「マス・コミュニケーション」
の機能としたものの、各機能の説明部分では「マス・コミュニケーション」だと意味がずれてし
まうので「マス・メディア」としてある。

[解答例]

マス・コミュニケーションとは、新聞・テレビ等のマス・メディアを通じて、不特定多数の受け手
に大量の斉一的メッセージが伝達されるコミュニケーション現象のことである。

アメリカのコロンビア大学の社会学者P.ラザースフェルドは、R.K.マートンとの共著論文で、マ
ス・メディアの影響力に注目して、マス・コミュニケーションの機能を3つに分類した。第一に「地
位付与機能」は、マス・メディアが好意的に採り上げることで、社会的問題・人物・組織・社会活動
等に高い社会的地位・威信・権威を付与する機能である。たとえば、マス・メディアに社会学者が登
場すると、多くの学者の中から選ばれるほどの重要人物だと一般の人々は評価し、その行動や意見に
も一目置くようになる。

第二に「社会規範の強制機能」は、暗黙のうちに世間に知られていた違反の事実をマス・メディア

が改めて公衆の面前に暴露することで、違反への肅正運動を形成する機能である。たとえば、政治家の不透明な会計処理が横行していても通常は見過ごされているが、ひとたび特定の政治家の問題がマス・メディアで採り上げられると、その政治家だけが非難の集中砲火を浴びることになる。

第三に「麻醉的逆機能」は、マス・メディアが大量の情報を流すことで、社会問題に対して大衆を無感動・無関心にしてしまう機能である。たとえば、現代の社会では、人々はマス・メディアを通じて大量の政治情報を得られるが、情報の視聴時間が多くなるほど、自分で考え行動する時間は短くなる。そのため、政治に関する情報を得るだけで満足して、自分で考え行動しなくなってしまう、政治ニュースは大量に消費されても投票率は低下していくのである。

この3機能はテレビ放送が本格的に普及する前の1940年代後半に定式化されたものであり、その後の発展を踏まえていないが、現在でもマス・コミュニケーションの特徴を理解するための学説として意義は失われていない。

以上

[2016年度 問題]

家族の機能について、マードックの説を中心に説明せよ。なお、パーソンズの説についても言及すること。

[解答のポイント]

① 家族の機能の定義

家族が社会全体または家族成員に対してなす貢献、ということを書いておきたい。

② マードックの4機能説

4つの機能の名称およびそれぞれの説明は、適切に示すことが必要である。また、この4機能は核家族が担っていることも書いておきたい。また、4機能説と密接に関連している核家族普遍説について言及してもよい。

③ パーソンズの2機能説

2つの機能の名称は、適切に示すことが必要である。

④ その他の家族機能説

オグバーンはややマイナーなので7機能それぞれの名称は書けなくてもよいが、7から1に減少したことと、残ったのは愛情機能だけということは示しておきたい。

上記のうち、優先順位は、②・③・①・④となる。

[解答例]

「家族機能」とは、家族が社会の維持に対して、あるいは家族成員個々の欲求充足に対してなす貢献のことである。アメリカの文化人類学者G.マードックによれば、一組の夫婦と未婚の子どもからなる集団である「核家族」は、夫婦間の性的欲求の充足・規制を担う「性機能」、共住共食および性にもとづく分業としての「経済機能」、子どもを産む「生殖機能」、その子どもを世話して一次的社会化をする「教育機能」の4つを果たしている。このうち、性機能と生殖機能がなければ社会が消滅するし、経済機能がなければ生命そのものが維持できず、教育機能がなければ文化が終わりを告げる。このように、最小の親族集団であり社会の核となる単位としての核家族は人間の社会生活にとって必要不可欠な4機能を果たしているため、時代と地域をこえて、それ自体として単独に、またはより大きな複合的な家族の構成単位として常に普遍的に存在しているという「核家族普遍説」をマードックは提唱した。

これに対してT.パーソンズは、近代社会ではもはや経済機能と生殖機能も家族固有の機能とはいえなくなったと主張し、家族の本来の機能として、子どもたちを社会の一人前の成員にしていく「子どもの一次的社会化」と「成人のパーソナリティの安定化」の2つを挙げた。

またW.オグバーンは、近代工業が発展する以前の家族には、経済機能・教育機能・保護機能・地位付与機能・宗教機能・娯楽機能・愛情機能の7機能があったが、近代化・工業化の進展に伴って愛情機能だけが家族内に残り、他の6機能は家族の中で衰退するか、社会の中の専門機関や制度に吸収されつつあると指摘した。同様にE.バージェスも、近代的な「友愛家族」は専門的制度や機関に代替されない愛情の機能を果たすとしている。

このように、パーソンズは「本来の機能が明確になった」と積極的に論じるのに対して、オグバーンらは家族機能の変化を消極的に論じる違いはあるが、いずれも愛情機能・精神安定機能を強調する特徴を持つ。

以上

[2015年度 問題]

スペンサーの社会進化論について説明せよ。

[解答のポイント]

東京都 I 類 B では、2011 年にほぼ同ジャンルのテーマ（「コントによる社会静学及び社会動学について述べた上で、コントの三段階の法則を説明せよ」）が出題されている。また、スペンサーを単独で書けるほどの内容は一般的な社会学の教科書には掲載されていないため、本年のテーマは予想外であった。

そのため、以下は模範答案（絵に描いた餅）ということで約 800 字の文章にしてあるが、実際は基本的な内容だけ書ければ十分だろう。

1 社会進化論についての定義

まずは、社会進化論が社会の歴史的変動について、生物進化論の影響を受けつつ説明しようとした理論であることを述べておきたい。

2 スペンサーの議論の時代的背景

スペンサーが社会進化論を述べた 19 世紀中ごろのイギリスという時代の特徴として、産業革命と自由放任主義経済による経済的発展について触れる。

3 スペンサーの社会進化論の内容

最低限、押さえるべきは、①社会有機体論、②進化の一般原理（同質なものから異質なものへ）③「軍事型社会から産業型社会へ」の流れ、である。

4 スペンサーの社会理論の今日的意義

一方では大規模な社会政策が要請された大恐慌以降、「適者生存」の自由主義経済の主張が説得力を喪失したこと、他方では今日まで続く機能主義的理論の先駆となったという功罪を挙げておけばよい。

上記のうち、「3 スペンサーの社会進化論の内容」が一通り書かれていれば、合格ラインは超えるだろう。また、本稿では採り上げなかったが、コントと対比して説明してもよい。ただし、その場合はスペンサーが主役であることを忘れないこと。コントの説明の方が多くなってしまうのはバランスが悪い。

[解答例]

社会進化論とは、ダーウィンの生物進化論に基づいて、社会の歴史的変動を説明しようとした理論であり、社会学説史的には社会発展段階論の一つである。

スペンサーが社会進化論を唱えた 19 世紀中葉のイギリスは、ナポレオン戦争等の対外戦争に勝ち抜き、折からの産業革命と国家の経済的規制を最小限にすべきとする自由放任主義的政策とが奏功して未曾有の経済的繁栄を謳歌していた。

そのような時代背景にあって、スペンサーは、社会を生物有機体に見立ててその進化を説明しようとし、両者の類似点として成長・機能分化・相互依存・進化等を挙げて社会有機体論を唱えた。その主張の基礎をなしたのが進化の一般原理であり、スペンサーは、進化とは不確定な同質性から確定的な異質性への変化であるとした。これを社会に当てはめると、役割分化が進んでいない原始共同体で

は人々の専門分野は不確定でみな同じような仕事をし、分化が進んだ近代社会では専門分野が明確化され各々が異なった仕事をするようになることを指す。また、有機体と社会とをともにシステムとみなす立場から、両者に共通する機能として、他のシステムに対抗する必要から生まれた規制機能とその上で自らを維持する機能とを見出し、一方で、前近代社会を規制が強く働く軍事型社会であるとし、そこでは個人は全体の目的の為にあるので自由はなく協働を強制されたとし、他方で、近代社会を維持が強く働く産業型社会であり、個人の為に全体があるので個人の自由が尊重され自発的協働がみられるとした。

このようにスペンサーは個人の自由の実現と産業社会の到来とを社会の法則であると考えて、生物進化論における「適者生存」のアイデアを経済活動にも適用し、社会福祉などの国家介入に強く反対した。そのため、その主張は世界恐慌後の大規模な社会政策の時代に至って人々への影響力を失ったが、その発想は後の構造・機能主義理論の先駆として重要な意義を持った。

以上

[2014年度 問題]

社会的自我に関するG.H.ミード及びC.H.クーリーの理論について、それぞれ説明せよ。

[解答のポイント]

1 社会的自我の定義

「社会関係を通じて形成される」という特徴を示しておきたい。

2 G.H.ミードの理論

「客我 (me)」と「主我 (I)」(訳語と英語のどちらかが書けていればよい)、「プレイ段階」と「ゲーム段階」、「一般化された他者」のキーワードは示しておきたい。

3 C.H.クーリーの理論

「鏡に映った自我 (自己)」、「第一次集団」のキーワードには触れておきたい。

4 ミードの自我論とクーリーの自我論の違い

問題文では2人並べているのだから書けた方がよいが、ミードによるクーリー批判は公務員試験対策としてはかなりマイナーな知識であるため、書けなくてもよいだろう。

なお、時代順としては、「クーリーの自我論→ミードの自我論」なので、本来であればその順番の方が書きやすいが、解答例は問題文に合わせた順番にしておいた。しかし、一通り論点に触れていれば、順番は逆でもかまわないだろう。

[解答例]

「社会的自我」とは、他者との社会関係を通じて形成される自我のことである。R.デカルトに代表される近代哲学では、自我は生まれながらに人間に備わったものだと考えられてきたが、アメリカの社会学者のG.H.ミードとC.H.クーリーはこのような見方を批判し、自我は他者との関係において社会的に形成されるという自我の社会理論を展開した。

まずミードは、人間の自我は他者の役割・態度を取得する過程の中で形成されるとした上で、自我を、社会的価値・役割を内面化した部分である「客我 (me)」と、客我に対する積極的・主体的反応である「主我 (I)」の2側面に分けて考察した。そして、自我の発達過程において、当初の「プレイ段階」では、対面関係にある重要な他者との相互行為の中で相手の態度や視点を学んでいくが、「ゲーム段階」になると、複数の他者の多様な役割期待を組織化・一般化して「一般化された他者」の役割期待に 대응していくようになるとした。

またクーリーは、人間は、他者との直接的で親密な接触の過程の中で、他者の反応を一種の鏡のようにして自分自身を認識し自我を形作っていくとして、他者の反応から得られるこの自我の社会的側面のことを「鏡に映った自我」と呼んだ。そして、自我発達の基礎となる集団として、「第一次集団」の概念を提示した。「第一次集団」とは、成員相互の親密で直接的・対面的な結びつきと協同を特徴とする集団である。この集団は、個人の社会性と「第一次的理想」(親切・忠誠・奉仕・公正等)を形成する上で基礎となる点で、第一次的とされる。例としては、家族、近隣住民、子どもの遊び仲間が挙げられる。

時代的に先行していたクーリーの自我論に対して、ミードは、クーリーの他者像は観念的であると批判して他者を具体的・現実的に考察しようとした点で異なるが、ともに社会学における自我論の古典として評価されている。

以上